

---

# 立派な魔法使い 偉大な悪魔

AL

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

立派な魔法使い 偉大な悪魔

### 【Nコード】

N 8 1 3 3 T

### 【作者名】

A L

### 【あらすじ】

世界を救った二人の英雄。生きている時代・世界が異なっていたから彼らが、会おう事は無かった。しかし二人にはそれぞれ息子がいた。英雄の息子ネギ・スプリングフィールドとダンテ。彼らに世界の危機が訪れる。

## prologue (前書き)

元々1月にR - 18で投稿しましたが、内容的に18禁にはならな  
いな、と思いましたので年齢制限を取りやめて再び投稿しました。  
非常に非常に書く速さは遅いですが、よろしく願います。

## prologue

千の魔法を使いこなす<sup>サウザンド・マスター</sup> “千の呪文の男”と謳われた最強の魔法使い——ナギ・スプリングフィールド。世界を旅し、その力で多くの人を救ってきた彼は“<sup>マギステル・マギ</sup>立派な魔法使い”の代表格であり、魔法世界で彼を知らない者など居ないほどである。

彼の名を一躍世界に轟かせたのは、20年前の魔法世界における帝国と連合の大戦争であった。開戦当初は、劣勢であった連合側に付いて奮戦。帝国には“赤毛の悪魔”、連合には“千の呪文の男”と恐れ讃えられる程の活躍をする。

その後、大戦を裏から糸を引いて操っていた秘密結社<sup>コズモエン</sup>“完全な<sup>テレケイア</sup>世界”、さらにその黒幕<sup>ライフメーカー</sup>“造物主”を壊滅させ、結果帝国と連合を和解させた。その功績により、魔法世界を救った英雄と称えられた。

しかし魔法世界では、彼は1993年に死んだとされている。

約2000年前、人間界は魔界の侵攻を受けた。魔界に住む悪魔達の圧倒的な力の前に、人間はなす術<sup>すべ</sup>なく蹂躪された。

そんな中、魔界の皇帝が率いる魔帝軍を凄まじい勢いで薙ぎ倒す者が現れた。それは魔帝ムンドウスの右腕とも言われた魔剣士スパードだった。彼は魔帝軍の幹部でありながら、魔界を裏切り人間に味方をした。その理由は、悪魔にはない人間の魂の美しさを知ったからだ。それを守るため彼は魔界を敵に回し、そして魔帝に打ち勝った。

その後スパードは己の力の大部分と、自身と同じ名を持つ魔剣、そして汚れなき巫女の血を用いて魔界と人間界を繋ぐ道を塞いだ。そして魔界による人間界の侵攻は幕を閉じた。

その後スパードは表舞台から退いた。人間界のとある領主となっ

た説があるが、悪魔である彼が今だ生きているのか、死んでいるのかは確認されていない。

ナギ・スプリングフィールド、スパード。二人は、英雄である。生きている時代・世界が異なっていたからこそ、二人が会うことはなかった。

しかし二人にはそれぞれ息子がいた。英雄の息子ネギ・スプリングフィールドとダンテ。

彼らに世界の危機が訪れる。

## 一話

この街にはマフィアからチンピラ、すねに傷を持っている者が集まっている。そのため抗争、暴力は日常だ。まさしく掃きだめと呼ぶに相応しい。

その埃っぽくて薄汚い街の中に、赤い派手なネオンサインが“Devil May Cry”と点滅している店がある。とある凄腕の便利屋の事務所らしい。

その事務所内にはドラムセットやビリヤード台があり、隅にはハイドロックをガンガンと響かせている年代物のジュークボックスがあった。

また、何の獣の頭か分からない物が剣に串刺しにされている。それも一つではなく、いくつもだ。

また、デリバリーピザの箱が散乱している。お世辞にも掃除が行き届いているとは言えない、と言うよりも汚いと言った方が正しい。そして随分と前にローンを完済した黒檀の机に足を投げ出している男がいた。彼がこの便利屋の主人であり、悪魔が恐れる男——ダンテだ。

彼は真っ赤なコートに黒いレザーパンツという派手な恰好をしている。

仰向けの顔には雑誌が乗せられていて、雑誌の端からはみ出した銀色の髪が見える。どうやら寝ているようだ。

足を乗せている机には、スライドに『BY . 45 ART W ARKS』『FOR TONY RED GRAVE』と彫られた二丁の大きな拳銃が並べて置かれている。これはかつて「四十五口径の芸術家」とまで呼ばれ、その名を馳せた名工の遺作であり、ダンテのために手がけた双子の拳銃である。

またダンテが座っている椅子の傍らには、口を開いた髑髏が柄に装飾されている剣が立て掛けられていた。身の丈もありそうな剣の

刀身は照明を鈍く反射している。

しばらくすると、机にあるレトロな黒電話が事務所にやかましい音を鳴り響かせる。

ダンテは軽く舌打ちをして鹿皮のブーツを履いた足を持ち上げると、机に踵落としをする。その衝撃で受話器がふわりと弧を描いて、綺麗に彼の右手へと納まった。

「あいにくだが今日は休みだ」

顔に雑誌を乗せたままそう言うと、受話器を台に向けて投げた。

ダンテは気が乗らない時は仕事はしない上に、週休六日制を掲げている。そして今日の彼には仕事をする気はなかった。

「さてもう一眠りとするか」

再び眠りに入ろうとすると、今度は車の止まる音が聞こえる。

すると扉から小肥りした小男が事務所へ入ってきた。彼はエンツォ・フェリーニョという情報屋でダンテとはそれなりに長い付き合い合っている。

「相変わらず汚ねえ事務所だなダンテ」

エンツォの飄々とした声を聞いたダンテは、顔の上の雑誌をずらして怠惰の色が見える目でその男を見た。そして軽くため息をつく。

「エンツォか……悪いが今日はもう閉店だ。帰ってくれ」

それだけ言うとダンテはまた雑誌を元の位置に戻した。エンツォはそれを見て呆れた声を出す。

「いくらなんでも昼の1時に閉店は早すぎるだろ。せつかくお前さんに仕事持ってきてやったのによお、つれねえな」

「今日は気が乗らないんだよ。それに俺がハッピーになる仕事を最後に超越したのはいつだ？最近はずまんねえ仕事ばかりだ。確か前はバイク修理だったな。で、今度は子猫でも探すのか？俺は認めんだね。つまり他をあたれってこった」

ダンテが言ったように、エンツォが仕事の話を持ってきたと思っても、ここ最近が悪魔が絡まない合言葉なしの“つまらない仕事”が殆どだ——もっともダンテの基準でつまらないだけで、そこいらの便利屋ではとても手に負えないものが多いが。

そしてダンテも一応エンツォの顔を立てるために何度も嫌々かつ渋々ながら引き受けていたが、もう引き受けるつもりはないようだ。しかしエンツォは、ダンテが必ず仕事を受けるとわかっていた。なぜなら今回はいつもとは違うからだ。

「確かにいつもはお前さんからしたらつまんねえかもしれないが、今回は大物で——」

エンツォは勿体ぶるように言葉を切った。そして口角を上げて続ける。

「——合言葉付きだぜ？」

それを聞いたダンテの雰囲気が一変した。顔に乗せた雑誌を机へ放り、投げ出していた足を降ろす。そしてエンツォを見た。先程までの怠惰な目ではなく、まさしく狩人の目で。

「おいおい、そいつを先に言えよ！合言葉ありならいつでも大歓迎だ」

ヤバイ仕事ならダンテはモチベーションが上がる。さらに合言葉付きとなれば余計にだ。

「へへっそうこなくっちゃあな。よしっ、こいつが狙い（ターゲット）だ」

エンツォは一枚の写真をカバンから出してダンテの前に放る。ダンテがつまみ上げて見たその写真には、10歳くらいに見える金髪の女の子が紅茶をすすっている姿があつた。これを見てダンテは苦い顔を浮かべる。

「……エンツォ。おまえこういう“子猫ちゃん”と遊ぶ趣味があつたのか？まあ趣味ならなにも言わないが……」

「何勘違いしてんだ！そんな趣味はねえよ。俺には妻も娘もいるんだぞ」

「間違えて自分のコレクションだしちまったんだろ？気に病むなよ、黙っておくさ。で、本当の写真は？」

からかいながらダンテは写真をエンツォへ投げて返した。だがエンツォは返された写真を指で軽く叩きながらため息混じりに口を開いた。

「正真正銘こいつが今回のターゲットだ。確かにこんなりだが、かなりの大物らしい。下手な大悪魔なんざ一蹴するほどのな」

そう言つとまたエンツォは指で写真をスライドさせて、ダンテの前まで写真を持って行つた。ダンテは写真を再び手にとる。先程と違ってふざけた様子もなく、じつと写真を見つめていた。

「わかったよ。それでこの“子猫ちゃん”とはどこに行けば遊べるんだ？」

手にある写真をヒラヒラと振ってダンテが尋ねる。エンツォはカバンから一枚の書類を取り出してダンテの前に置いた。そして懷から葉巻も取り出した。

「日本の麻帆良学園ってどこだな。詳しい場所はいつもとおりそれ見てくれ。報酬は——」

「報酬はいくらでも良い。言い値でもな」

言葉を遮ったダンテは手にしていた写真と書類をコートにしまい、立ち上がった。

そして傍らにあつた長剣——リベリオンを担ぎ、後ろにあるギターケースに入れる。さらに机に置かれていた二丁拳銃——通称エボニー&アイボリーを手取る。軽く銃を手で回してから腰のホルスターに仕舞い、そしてエンツォの方へ近づいていく。

エンツォは葉巻をくわえて火をつけようとしていた。

「俺の近くは禁煙席だ」

ダンテは葉巻をつまみ上げてエンツォの喫煙を止めた。ダンテは煙草や葉巻が嫌いだった。彼曰く、自分で自分の肺をや二漬けにするのが楽しいか？ということらしい。つまみ上げた葉巻をエンツォへ投げ返した。

「ああすまねえ、そっぴや嫌いだったな」

そつ言つと受け取った葉巻を元に戻す。

「ところでこないだ金貸してたよな？そろそろ返し——」

エンツォは借金の催促をしようと顔を上げる。そこには片手を振り「アディオス」という挨拶と共に事務所から出て行くダンテの背中が見えるだけだった。

## 二話

小学校から大学まで擁する麻帆良学園の敷地は、とても大きい。まるで一つの街であり、学校と言われなければ分からないだろう。

その大きな敷地の中央には、巨大な木がそびえ立っている。270mにもなるその巨木を学園の者は『世界樹』と呼び、学園の象徴的な存在であった。

その世界樹には不思議な現象が起こる。それは木が光るというものだ。

この不思議な現象ゆえに、世界樹に興味を抱くものが絶えず、世界樹に関係するサークルがかなりの数存在している（ちなみに世界樹に関する噂・都市伝説も多い）。

そのサークルの中には当然世界樹を観測・研究するものもあり、観測・研究データも長年に渡って蓄積されていた。

そこから、22年の周期で発光現象が起きることが随分前から分かっていた。

また、世界樹に生えている発光性の苔類が、周期的に活発な発光を行っていることが原因ではないかと推測されている——もっとも一般の『表社会』の説に過ぎないが——。

本当は、普通の常識が通じない『裏社会』で言われている説が正しい。

その説では世界樹のそもその発光現象は『長年木が蓄積してきた魔力量が最大に近付いた時に起きる、魔力の放出現象である』とされていて、一種の生理現象に近い物であるということだ。

また、これには大気の魔力密度を均一に保つ効果があるとされていて、魔力の暴走を抑止する働きがあるとされていた。

もともと植物にはそういった、辺りの気や魔力を蓄積・放出する力がある。世界樹の場合、その蓄積量・放出能力が異常といえるほどに高いわけである——世界樹が今のような巨大な姿になったのも、

この力の副次的な結果である――。

その異常とも言える能力のために、大気へ放出される魔力は可視出来るほどに高濃度かつ大量になる。そのため発光しているように見えるわけである。

つまり発光現象の周期とされているものは、実のところ魔力の放出現象の周期というわけである。

ただしこの魔力の放出は、世界樹自身が持つ魔力貯蔵量の調整機能にすぎない。そのため異常気象や大気に存在する魔力の量や密度などで周期が少し前後することも起きたりもする。

そして最後に発光現象が確認されたのは、2ヶ月前の6月に開かれた学園祭『麻帆良祭』の時だった。この時は、ここ数年の異常気象により、22年の周期よりも1年早い21年ぶりの発光であった。つまり世界樹はほんの2ヶ月前に、蓄積していた大量の魔力を放出した、ということだ。

しかしなんと“今”世界樹が発光している。まだ麻帆良祭から2ヶ月も経っていないにも関わらないのにだ。

それもぼんやりとした弱々しい発光ではない。前回の麻帆良祭の時とは比べものにならないくらいに強い発光であり、光の柱のようである。

当然この出来事は瞬く間に学園中の生徒はもちろんのこと、教員達の話題となっていた。そして、普段は魔法使いの立場を隠している一部の魔法先生・魔法生徒と呼ばれる間でもだ。

いや、むしろ魔法先生達の方が事の重大さを理解し、より騒然となっていた。

それもそのはずである。現在、世界樹が発光しているということは、本来なら22年ほどかけて蓄積される魔力が、一瞬にして満たされたということだ。それも柱のような強烈な発光となれば、世界樹の魔力放出能力がオーバーペースに働いていることになる。

このままでは処理しきれない魔力が、どんどんこの地に溜まり何が起こるかわからない。大規模な魔力の暴走が起こり辺りが消え去

る、といった自体も十分に考えられた。そこで麻帆良学園の理事長である近衛近右衛門は、魔法先生達に対して警戒体制をとらせていた。

そういった事情を知らない一般の生徒にとってはなかばお祭り騒ぎだったが、麻帆良学園は油断できない緊迫した状況になっていた。学園が騒然となつている中、屋根の上で煌々と光る世界樹を眺めている少女がいた。

「やれやれ……冗談ではないぞ。見てみる！ スキ間から漏れ出す魔力だけあの輝き」

その少女は金色の長い髪を風になびかせながら、人形のように整った顔にうんざりとした表情を浮かべていた。

「おまけに向こうの世界のものが見えるとは」

彼女が見上げた先には、『墓守り人の宮殿』と呼ばれる魔法世界の建造物の姿が浮かんでいた。

少しの間彼女は何をするでもなくその眺めをじっと見守っていた。彼女が何かを考えている様子は見て取れるが、その真意を知ることが出来ない。

そんな彼女のつかの間の思考も、ある姿が視界に映ったことで中断させられた。

「あれは、ぼー……や？」

今上空に浮かんでいる宮殿で誰かが戦っている姿が見えたのである。普通ならばそのような小さな姿は見えないし、例え見えたとしても不鮮明である。

だが彼女にははっきりと見えていた。戦っているのは、弟子であ

るネギ・スプリングフィールドだ。もつとも、ネギの姿・戦闘レベルは彼女の知っているものとは桁違いだった。もはや別人と言っても過言ではないほどに。

そしてすぐに彼女は何がネギをここまで変えたのか、その答えに行き着いた。

「間違いない……な。よもや マギア・エレベア 闇の魔法とは。確かに、この短期間であそこまになるにはそれしかあるまい」

もともと マギア・エレベア 闇の魔法というものは彼女が昔に考案した技法である。しかし取得の難しさや使用による費用対効果から、彼女以外まともに扱えないものであった。そのため闇の魔法は彼女固有の技法であると言われていた。だが、その彼女固有の技を、魔法世界へ向かってから二カ月の間で弟子であるネギは取得していた。

ネギが闇の魔法に手を出したことに、師匠である彼女はなんとも言い難い気持ちだった。なぜなら闇の魔法は強大な力をもたらす反面、使用するにはリスクがあるからだ。

それは、術者が闇に引き込まれることだ。その結果、力に押し潰されて自滅するか、人間から理性のないただ破壊するだけの魔物に成り果ててしまうかである。

仮に上手く制御できたとしても、もはや人間という枠組みを超えてしまい、新しい種として転生してしまう。つまり種族としての人間にはもう戻れない、ということであり、ネギはその道を選んだと言うことになる。弟子の選択に少女は呆れつつも、弟子が自分と同じ道を選択したことを少なからず喜んでいた。

そんな時、背後に気配が降り立った。すこし前に『魔』に属する者が学園に侵入したことを結界を通して知っていたが、今は事態が事態だ。それにそう強くない反応だったので放っていたが、どうやら向こうから少女に会いに来たらしい。

「貴様は何者だ？」

少女――最強種とされる吸血鬼の真祖、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルが振り返る。

そこには赤いロングコートを纏った、悪魔が恐れる最強の狩人――ダンテがいた。

### 三話

混濁する意識の中。認識できるのは、自分の姿すら見えないほどの暗い闇の中にいることだけ。

自分がいつからここにいるのか、自分がどうやってここへ来たのか、自分が一体だれなのか。わからない、知らない、考えられない。いつの間にか、この一縷の光も入らない暗闇の大海に浮かんでいた。混濁する意識の中。あるイメージが浮かんでくる。酷く不鮮明でとぎれとぎれだった。しかし朧げな赤色が妙に意識に残った。

このイメージ、赤色について思い出そうとしたとき、再び意識が暗闇にのまれた。混濁した意識は抗うこともせず、またも闇の海へと消えた――

＊

煌々と輝く世界樹。そこから少し離れた建物の屋根に、二人の最強がいた。

一人は少女の姿をした ハイ・デイルイトウォーカー 吸血鬼の真祖。魔法世界では、神に準ずる古龍と同格の最強種として謳われている存在である。

一人は赤いコートを纏った デビルハンター 悪魔狩人。伝説の魔剣士の血を引く半人半魔であり、魔界に君臨する魔帝ムンドウスを封印した最強の悪魔狩人である。

吸血鬼の真祖――エヴァンジェリンは金色の髪を風になびかせ、刺すような眼差しをむけている。そして最強の悪魔狩人――ダンテは銀色の髪をかき揚げ、苦い顔を見せていた。

「貴様は何者だ？」

エヴァンジェリンは言葉短く問う。声色、顔色から苛立ちが見え

る。

「何者かって？ あー、俺はこんな姿した悪魔を狩りにきた、しがない便利屋さ」

ダンテはコートの内側から一枚の写真を取り出した。

「この嬢ちゃんみたいな姿らしいんだが……どうやら見つかったみたいだな」

その写真はエンツォが持ってきたものだ。写真には金髪の少女が紅茶をすすっている姿が写っている。その少女はまさしくダンテの目の前にいるエヴァンジェリンである。

それを聞いたエヴァンジェリンの顔が、僅かに歪んだ。

昔から彼女の首を狙う輩は数多くいた。それこそろつきのような賞金稼ぎから、一国の正規軍までもだ。

しかし呪いによって麻帆良学園に封印されてたこともあり、もう随分とそのような輩はいなかった。

だが目の前の銀髪の男は自分を狩りに来たという。なんという愚か者で、なんというタイミングに来るのか、とエヴァンジェリンの心中は穏やかではなかった。

なぜなら取り払っておかなければならないことが増えたからである。

何事も大きな障害を取り除いておくことは当然の行動であるが、時には小さな障害や要素にはそれ以上に気を払わなければならない。それは始めは小さかった要素が後々になって大きな障害となったり、小さな要素が大きな番狂わせを起こすことがあるからだ。

そしてそういったハプニングは、えてしてこのような一大事に限って起こるものである。エヴァンジェリンはそれを知っているからこそ、目の前の要素を払っておきたかった。そして彼女には学園に

侵入した魔を払う任もある。

つまりエヴァンジェリンにはダンテを始末する理由があった。

「私を狩りに来た——か。普段なら遊んでやるところだが、今は後で光ってる樹の世話があるからな。悪く思うな。直ぐに終わらせせてもらおう」

そう言うと、エヴァンジェリンの右手から白い煙が溢れ出す。パキパキという音が聞こえ、同時に当たりの温度が急激に下がった。それは彼女の右手が作りだした冷氣によって、空気中の気体が固体へ昇華している現象であった。そしてそれはエヴァンジェリンが戦闘態勢に入ったという証拠である。

しかし一方のダンテは、両手を軽く挙げて肩をすくめた。

「お気遣いありがと嬢ちゃん。でも残念ながら大ハズレみたいだ。あのヘドが出そうな、悪魔の臭いがしないんでね」

ダンテが苦い顔を浮かべていたのはこのせいだ。

そもそもダンテは悪魔狩人であり、読んで字の如く、悪魔を狩るのが彼の本業である。そして今回は、久々に強くてヤバい悪魔だと聞いて、アメリカからはるばる日本の麻帆良学園まで来たのだ。

ところが実際に対象と接触してみれば、“悪魔の臭い”がないのだ。この“悪魔の臭い”は悪魔が放つ独特な臭い、というよりも臭いを含めた五感に働き掛ける悪魔が放つ気配といったほうが正しい——ダンテ曰く、獣の血の臭いに近いらしいが。

ダンテはそれを長年の経験、そしてなによりも鋭い本能によってかき分けてきた。その“悪魔の臭い”がないという事は、ターゲットとして渡された写真に写る目の前の少女が、悪魔ではないということを表していた。

（つたく、エンツオの馬鹿野郎。ガセネタ掴まされやがって）

口には出さず、この仕事を持ってきたエンツオにダンテは悪態をついた。

元々、裏の社会でもガセネタというのは溢れ返っているものである。そのためエンツオなどの情報屋や仲介屋は、その情報の正確さ、真偽を見極めなければならない。その情報によって大金が動き、様々な組織が動くからだ。そしてなによりトチれば、情報を流した自分がバラされるからでもある。

エンツオは金にうるさいが、そう言った真偽を見極める情報網となにより鼻の効く男である。そのため、ダンテはエンツオがガセネタ持ってきたことが意外でもあった。

「お騒がせしてすまないな、嬢ちゃん」

そう言うダンテは背を向け立ち去ろうとした。ターゲットが悪魔ではないなら、彼の仕事ではない。

そして彼の背にある大剣リベリオンの刀身には、エヴァンジェリンの姿が映っている。また、腰に提げられた二丁拳銃のエボニーとアイボリーの銃身が、世界樹の光を鈍く反射していた。

「悪魔ではないから帰る？ 確かに私は悪魔ではなく、魔法使いだ。だがそれは言い訳ではないのか？ 私には貴様が尻尾巻いて帰るようにしか見えないよ」

エヴァンジェリンがダンテの背に向けて言った。挑発ともとれるそれを聞いたダンテは、足を止めた。

「あいにく俺の好みは悪魔だけだね。魔女の知り合いならいるが、魔法使いなんてファンシーでファンタジーなもんには興味はないん

でね。お花を咲かせる魔法でも唱えてな」

「悪魔とか言ってる貴様が、魔法使いをファンタジーと言うか？」

ああ、それと私はファンシーな魔法使いではない。私は悪い魔法使いだ、極悪級のな」

「そんなフリフリでロリータな格好で悪い魔法使いか。極悪ってなら——」

それまで背を向けていたダンテが振り返った。そしてダンテの手には、いつの間にか腰のホルスターから抜かれた銃が握られている。

「——血の方がらしく見えるぜ？」

ダンテは躊躇なく引き金を引いた。銃口からダンテの魔力が籠められた弾丸が吐き出される。

銃弾はエヴァンジェリンの方へ空気を裂いていく。エヴァンジェリンは微動だにしない。

そして弾丸はエヴァンジェリンの頭を——かすめた。かなり近かったため、エヴァンジェリンの金色の髪が数本ちぎれてしまった。

弾丸が直ぐになにかをぶち抜いた。赤い液体がエヴァンジェリンに降り懸かる。彼女の背後には、頭部に大きな風穴を空けた召喚魔が立っていた。

その召喚魔は、隆々とした肉体に蝙蝠のような皮だけの翼を生やした姿だった。鋭利な爪を振りかざしたその姿から、エヴァンジェリンを後ろから襲おうとしたのだらう。そこをダンテが銃で撃つのだ。

頭部に風穴を空けられた召喚魔は力無く崩れ落ち、屋根から落ちた。

見回すと、いつの間にかダンテとエヴァンジェリンの回りには召喚魔が群がっていた。先ほどの召喚魔と同じような姿をしたものから、手に剣を持っていたり四つん這いで他の屋根を跳び移っていた

りと、様々な種類の召喚魔が確認できた。

それをくりと回って一度確認したダンテは、少しだけ口角を上げた。そして硝煙を上げるエボニーと、ホルスターから抜いたアイボリーを構える。

「Ha Ha! Let's Start The Party!  
(パーティーの始まりだ!)」

二つの銃口から、銃弾の雨が降り始めた。

腕を広げて左右から迫る召喚魔の群れに、一瞬にして十数発の鉛弾を浴びせ、撃ち落とす。直ぐさま腕を動かして前と後ろにも同様に銃弾を撃っていく。

前方にいた召喚魔の一体が力尽きても慣性でダンテに迫るが、それをダンテは蹴り上げた。蹴られた召喚魔は迫り来る召喚魔の壁に突っ込んだ。

そうして四方八方からくる召喚魔を的確に撃ち落とし、葬ってゆく。エボニーとアイボリーで別々の獲物を狩り、また、二丁の弾幕で召喚魔を蜂の巣にする。召喚魔と近接戦闘になっても、紙一重でかわして同士討ちを誘い、また、体術と銃撃を巧に織り交ぜて圧倒する。その様はまさに銃の音色を旋律に華麗に踊っているようだ。

そんなダンテの戦いを見て、召喚魔達にも恐怖心はあるのだろうか、怯んだように召喚魔達は距離をとった。

「どうした? ビビってんのか?」

ダンテが肩をすくめて召喚魔を挑発する。それを見て怒ったのか、隙だと思ったのか。四方から同時に召喚魔がダンテとの距離を詰める。召喚魔の爪や牙、手にした剣がダンテを仕留めるべく振るわれる。しかし、そこにダンテの姿はなかった。

「よしよし、タイミングは合格だ」

ダンテの声が聞こえてくる。

「ただ、速さが足りないな」

ダンテは真上の空中にいた。召喚魔の攻撃が当たる寸前に跳んで回避したようだ。彼の驚異的な跳躍力によって屋根から軽く数mは跳んでいた。

そしてダンテが空中で上下逆さまになり、頭が下になる格好になった。そのまま真下にエボニーとアイボリーを構える。さらに体を高速で回転させ——ダンテは引き金を引いた。それにより文字通り銃弾の雨が降る。真下にいた四体の召喚魔は銃弾の雨をまともに喰らい、凄まじい数の鉛弾を全身に浴びた。

ダンテが回転を止めて、屋根に降り立った。足元にはダンテの銃による妙技『レインストーム』を受けて穴だらけになった召喚魔が転がっていた。手元にあるエボニーとアイボリーの銃口は、連続で銃弾を発射する熱で加熱され、赤く光っていた。

まだ放熱をしているエボニーとアイボリーを器用にくるくると回し、ダンテは銃を腰のホルスターに納めた。その時、ダンテが背後からの殺意を感じた。普通なら気付かないほど小さな殺意だったが、非常に鋭い殺意だった。その殺意を放っていたのは——指先にビーム状の剣《断罪の剣》を出していた、エヴァンジェリンだった。

そして瞬動と呼ばれる移動法により、傍目には瞬間移動をしたように一瞬で間合いを詰めて、まだ背を向けているダンテに切り掛かった。

ダンテも一瞬の事にも関わらず反応し、目にも止まらぬ速さでリベリオンを抜いていた。そしてリベリオンと断罪の剣が凄まじい速度でぶつかり、甲高い音を立てた。

「後ろからなんて、ちょっと狡くないかい？」

断罪の剣と激しい競り合いをしながらダンテが話し掛ける。またまだ余裕がある。

「言っただろう、早く終わらせてもらおうと」

リベリオンと激しい競り合いをしながら、言葉を返す。こちらもしっかり全力は出していないようだ。

「それに貴様は思っていたよりも厄介そうだしな！」

それが合図だったかのように、両者が弾かれるように離れた。すると先程まで二人が競り合っていた所に、召喚魔の剣が振り下ろされた。その剣は粗悪なもので、切れ味の悪いものであった。しかし重量が非常に重い剣であったので破壊力が高く、そのため屋根に大きな窪みと亀裂が走り、破片が飛び散った。

「邪魔だよ」

エヴァンジェリンがまたもや瞬動で、召喚魔の後ろの空中に現れる。そして召喚魔の後頭部を蹴りつける。頸椎と頭骨が砕ける音と共に、召喚魔が屋根にたたき付けられる。

そしてまだ空中にいたエヴァンジェリンだったが、空中での瞬動——虚空瞬動により再びダンテを間合いに捉える。再びリベリオンと断罪の剣が火花を散らした。しかし今度は競り合いにならず、弾かれた。

そしてダンテは振り返って背後に迫っていた召喚魔を両断する。両断された召喚魔は、赤い血を噴き出しながら崩れ落ちた。一方でエヴァンジェリンも振り返って召喚魔の首を撥ねた。

断罪の剣には、触れた物を強制的に蒸発させる効果がある。そのため召喚魔がみるみる相轉移させられ、蒸発していく。

また、相轉移させられた物質は大量の熱を奪う。それは周囲の熱が奪われ、周囲が極低温にまで温度が低下するということを意味する。現に蒸発した召喚魔の周囲が凍結してゆく。

空気中の水分が凍結する中、互いに背を向ける形になったが、二人とも身を翻し、そのまま蹴りを繰り出す。そして両者の間で足がぶつかり、衝撃が走る。

「速いな嬢ちゃん」

「貴様もそれなりにな」

一瞬二人が笑みを浮かべた。そして再び離れる。

反逆の名を持つ剣と、死刑を執り行うという剣が激しくぶつかった。離れ、火花を散らしていく。

また、激しく弾き合う中、互いに迫り来る召喚魔を切り伏せていく。決して共闘ではない。

両者の考えは異なっている。ダンテにとって周囲の召喚魔は狩るべき対象であり、エヴァンジェリンにとっては邪魔な存在だから斬っている。ただそれだけだった。だが召喚魔を葬るという点では共通していたために、召喚魔の死体が見る見る積み重なっていく。

その速くて激しい剣舞のなか、赤い光が混じっているのが見える。それはダンテの持つリベリオンだった。リベリオンの刀身を赤い光が覆い、時折、パリパリと言う音と共にスパークがほとばしっている。

そして一度後ろに跳び、リベリオンを逆手を構える。

「Let's Rock! (派手にいくぜ!)」

ダンテが逆手に構えたりべリオンを素早く振った。すると刀身が

ら赤い光——これは魔力である——が放たれた。それはリベリオンの斬撃を魔力によって飛ばす『ドライブ』という技である。

「おまけだ！」

そういつてもう一度リベリオンを逆袈裟に振り上げる。二つの斬撃が召喚魔の群れを切り裂いていく。召喚魔の群れ、いや壁には大きな穴が出来ていた。リベリオンには微量の魔力が残っているように、僅かに刀身に赤い光とスパークが確認できた。それをダンテは、血をふるうように軽く振って魔力をふるい落とした。

そしてダンテのすぐ近く。そこには、瞬動で間合いを詰めたエヴァンジェリンがいた。冷たく輝く剣が迫る。再びリベリオンと断罪の剣が、大きな音をたててぶつかる。今度は弾かれず、競り合った。

「結界にかかったときの貴様の魔力や力は、たいしたものではなかった。あれくらいは掃いて捨てるほどいる」

激しさを増す競り合いの中、エヴァンジェリンが話し掛ける。リベリオンと断罪の剣からは、不快な音が絶えず鳴っている。二人のあまりの力に、足場となっている建物を押しつぶしていく。

「だが今の魔力を飛ばしたあの攻撃だ。あの瞬間、貴様の魔力が変わった。たしかに、数瞬だけ魔力の質を変え爆発的に増やすことも出来る。しかし貴様の場合、違うんだよ、質も、気配も！ あれは人間の出すものではない！」

エヴァンジェリンが語気を強め、同時に競り合いも彼女が圧倒し始める。

「もう一度聞こう。さあ、貴様は何者だ！」

ダンテは顔を伏せていた。銀色の髪に隠れて、表情は伺えない。彼の顔に浮かぶのは苦痛だろうか、それとも――。

「ふん。答える気はないか」

冷たい笑みを浮かべたエヴァンジェリンは一瞬だけ力を抜き、直ぐに力の向きを上へと変えた。ダンテは一瞬判断が遅れる。その一瞬が結果を変えた。

断罪の剣がリベリオンを上へと弾き、ダンテの手からリベリオンが離れる。上空へ弾かれたリベリオンは、くるくると回りながら落ちていく。その刀身には、ダンテが断罪の剣により貫かれようとする姿が映っていた。

## 四話

またあのイメージが浮かんでいる。前は酷く不鮮明でとぎれときれだったが、今浮かんでくるのは少しはつきりとしていた。それでもまともに見れたものではなかったが。

ふと気が付いたことがある。それは、印象的だった赤い色以外に青い色があったことだ。見える範囲が少なかったため、前は印象に残らなかったのだろう。

それだけではなく、音も聞こえた。それは金属と金属がぶつかり合うような甲高い音や、誰かが話している声。そして風を切る音に混じって聞こえてくる、天を震わすようなおぞましい叫びだった。

\*

麻帆良学園の中心地にそびえる世界樹。その近くで戦う二人の姿があった。踊っているかのような剣戟を繰り返していたが、今は競り合いになっている。

ただそれも長くはなかった。一人の剣が空へと弾かれ、もう一人が剣を構えている姿が見えたからだ。

剣を構えている者——エヴァンジェリンが断罪の剣を突き出す。冷淡に輝くその刃がダンテの腹を捉え、断罪の剣は安々とダンテの腹を貫通する。

ダンテの口から血が溢れ、鮮やかな赤い筋が口角からつたい落ちた。しかし刃が突き刺さっている腹からの出血はなかった。それは断罪の剣が帯びる極低温によって、刃の周りの体組織が局地的に凍りついていたためである。

血を吐くダンテに構わずエヴァンジェリンは断罪の剣を更に押し込む。そのためダンテの吐血量が更に増す。

エヴァンジェリンは決着がついたと確信した。断罪の剣は対象を蒸発させる。その例にない物質もあることはあるが、それはあくまでも例外。生物ならばほぼ存在しないに等しい。

つまり彼は間もなく蒸発する運命にある、とエヴァンジェリンは考えていた。

「やるじゃないか嬢ちゃん。一本取られるとは思ってなかったぜ」

しかしエヴァンジェリンの考えを裏切る声が響いた。その声はまさに軽快で、楽しそうな声だった。

思わず顔を上げたエヴァンジェリンの瞳孔は僅かに広がっていた。そしてその視線の先にあるダンテの顔には、苦痛はおろか汗一つなかった。むしろニヤリとした皮肉るような笑みを浮かべている。まさにエヴァンジェリンの神経を逆なでするような笑みだ。

おもむろにダンテが片手を掲げる。それを見たエヴァンジェリンがとつさに後ろへ跳んだ。ダンテに突き刺している断罪の剣を手から切り離し、新たに剣を精製する。ダンテは落ちてきたリベリオンを掴んでいた。

瞬間、二人は動いていた。まさしく一瞬の事だった。

「……なぜ生きている？ 並の魔物では耐えられんはずだ」

エヴァンジェリンは鋭い眼光を放つ。

「なに、ちよつと体が丈夫なだけさ」

しかしダンテは相変わらず笑みを浮かべている。

その笑みのすぐ下。ダンテの首元には断罪の剣が、エヴァンジェ

リンの首元にはリベリオンが突き立てられていた。互いに皮一枚。寸前のところで刃は止まっていた。

「それよりもどうする、まだやるか？ 吸血鬼のお嬢ちゃん」

ダンテの言葉でエヴァンジェリンの視線が更に鋭くなる。先ほどまでの激しい剣戟とはまた違った、全身を刺すような空気。常人なら意識が吹っ飛んでしまうようプレッシャーが、たった数秒の間広がる。

その無言の戦いを、ふいに破ったのはエヴァンジェリンだった。彼女は舌打ちをするとダンテの首元から断罪の剣を離れた。ダンテもそれに習いリベリオンを引いた。それを合図にしたかのように、ダンテの腹を貫いていた断罪の剣が音を立てて砕け散った。

「もちろん止めを刺すまでだ」

そこで言葉を切ると、エヴァンジェリンは右腕を振った。右腕から断罪の剣が離れ、離れた剣がダンテの首をスレスレのところを通り抜ける。

断罪の剣は少し離れたところにいた召喚魔の一体の眉間に突き刺さった。ダンテが振り返ると、召喚魔が断末魔を上げながらみるみる蒸発し、周囲の召喚魔が凍結してゆくのが見えた。

「……と言いたところだが、今はあの雑魚どもを蹴散らすのが先だ。世界樹を奴らに盗られたのでは元も子も無いからな」

エヴァンジェリンの両手が、再び冷気を纏う。相手はダンテではなく、麻帆良学園の空を覆い地上を跋扈する無数の召喚魔である。どうやら凄まじい速度で次々に召喚されているようだ。

「俺としてもそっちの方がありがたいね。それに嬢ちゃんとやり合う理由は無いしな」

ダンテが同意する。なぜなら彼としては悪魔ではないエヴァンジェリンと戦うよりも、あたりの悪魔を相手にしたかったからだ。それに世界樹へ向けて進んでいた召喚魔の群れから、一部が——それでもかなりの数だが——迫っていたからだ。さながら黒い波のようである。

「心配するな、こいつらが片付いたら相手をしてやろう」

エヴァンジェリンが呪文を唱え始める。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック《来たれ、氷精、闇の精。闇を従え吹雪け常夜の氷雪》」

魔法を行使するための始動キート、精霊に呼びかける呪文を唱える。すると彼女の右手に黒い魔力の塊が現れる。そしてエヴァンジェリンが右手を突き出す。

「『闇の吹雪』」

突き出されたエヴァンジェリンの右手から魔法が放たれた。色は黒く、風を切る音とともに巨大な渦を巻いている。まさしく黒い竜巻だ。黒く渦巻く竜巻は猛烈な吹雪を纏っていた。

闇の吹雪は、強力な吹雪と暗闇を発生させる魔法である。もともと高威力の魔法であるが、エヴァンジェリンは通常よりも多く魔力を籠めていた。そのため放たれた魔法の大きさと威力は、桁が違っていた。

闇の吹雪が召喚魔の群れを直撃した。猛る闇と吹雪のうねりが召喚魔を襲う。余りの力に召喚魔が原形を維持出来ずにバラバラになつていく。それでも闇の吹雪は直進を止めることは無く、黒い波を突き抜ける。

結果、召喚魔の波が真つ二つに裂けた。

「凄いな、これならこっちの出番はなさそうだ」

ダンテがその光景を見てエヴァンジェリンに拍手と共に言った。彼女が振り返ると、ダンテは屋根の端に立っていた。どうやら吐血も止み、腹の凍傷も治っているようだ。

手にはエボニーとアイボリーが握られている。

「そういうわけで俺は下にいる奴らをもらうぜ。上は譲ってやるよ。アディオス、子猫ちゃん（キティ）」

ダンテはウィンクをするとエヴァンジェリンの方を見たまま、背中からダイブした。そしてダンテは、それまで自分がいた所が爆発する光景を見た。

彼は知らないことだが、エヴァンジェリンのフルネームは『エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マグダウエル』であり、彼女はキティと呼ばれるのが嫌いだった。

そしてダンテは知らないまま、たまたまキティ（子猫）と呼んではまったことで、彼女の癪に障ってしまったのだ。

ダンテは女運がない方だと自覚しているが、それは極東の地に来ても変わらなかったようである。

「チッ」

ダンテが屋根からダイブした後、エヴァンジェリンは派手にえぐ

られた屋根を見て舌打ちをした。

エヴァンジェリンはダンテが罪の剣の一撃に耐えられるとは思っていなかった。断罪の剣に斬られても生きていとすれば、それはエヴァンジェリンと同じく不死であるか、高位の悪魔と同等以上の力を持った存在くらいである。

彼が学園結界に入ってきた時の反応は、かつて学園に進入したことがある爵位級の悪魔よりも弱いものだった。そのため彼女はダンテを不死でも高位の悪魔でもないと考えていた。

しかし実際に生きているということは、ダンテはエヴァンジェリンの考えていたものより厄介な存在だということになる。

やはり悪い事には悪い事が重なるものだな、とエヴァンジェリンが考えていると背後に誰かが降り立つ気配を感じた。

「なんだジジイ。指揮をとらなくていいのか？」

振り返るとそこには白い装束を着た頭が異様に長い老人がいた。

この老人は麻帆良学園の理事長である近衛近右衛門である。近右衛門は長く伸びた顎髭をさすりながら近付いてきた。

「おぬしを捜しにきたんじゃよ」

エヴァンジェリンは近右衛門の表情が普段の飄々としたものでも穏やかなものでもない、険しいものであることに気がついた。

「なにがあった？ 説明しろ」

なにかあったのだらうと察したエヴァンジェリンの語感も厳しくなっていた。

近右衛門は髭をさするのを止め、一拍置いてから口を開いた。

「ふむ、此度の一件がこちらの旧世界と向こうの魔法世界だけの問題では無くなってきたようだな。どうやら魔族・悪魔の世界、つまり魔界が動いているようだな」

エヴァンジェリンは再び思った。やはり悪い事には悪い事が重なるものだ、と。

一方ダンテは屋根から飛び降りる最中、先程まで繰り広げられた剣戟を思い返していた。

あの時彼は本気を出しておらず、加減をしていたとはいえ一撃を貰うとは思ってもいなかった。しかし彼は腹を貫かれてしまった。それは彼女が加減をすべきではない存在だったということである。

それに彼女は吸血鬼の真祖というものらしい。長いこと裏稼業・デビルハントをしてきたダンテもそんなものは初めて聞いた。

もっとも、実際はダンテの興味が向いていなかったただけであり、ダンテが悪魔をハントするように吸血鬼のハントを生業とする者はいる。

ダンテは久々に面白い仕事が回ってきたと喜んでいた。吸血鬼の真祖というものを初めて見て、それはなかなか手応えのある戦いが出来たからだ。

そしてなにより地面に降り立った彼を迎えた悪魔だ。

これまでのいた魔族の影を投影して作られた人形ではなく、自身の肉体と自身の意志で動く悪魔だ。

悪魔達はダンテが降り立った瞬間、赤く光る双眸を更に輝かせ狂喜していた。2000年前に魔界の人間界侵攻を阻んだ逆賊の血を受け継いだ者であり、ダンテ自身も封印されていた魔帝ムンドウスの復活を阻止した大敵である。

悪魔達にとってこれ以上ない仇である。彼を、往年の仇を血祭りあげる悪魔達はべくじりじりと距離を詰め、手にした刃や爪牙を

構える。

その時、おもむろにダンテが片手を前に出して——クイツと手招きした。

「Come on, WIMP! (来いよ、弱虫!)」

それを聞いた悪魔達の希薄な理性は弾け飛び、無数の赤い目が一斉に襲い掛る。

四方八方。逃げる場所はない。しかしダンテは銃のセーフティを外し、不敵な笑みと共に構えた。

「It's show time, BABY!」

\*

赤い色はまだあった。それもかなり近くにある。さっき浮かんだのイメージと違っていたもの。それは青い色が無くなり、黒い色があつたことだ。

そして何かが光っていた。ぼやけたイメージの中、それだけは妙にはつきりと見えた。

赤い宝石が縁取られた半球型の首飾り。見ていると温かいものが広がる。それはお守りとしてもらった物であり——形見だ。己の無力の為に守れなかった、己の無力の為に殺してしまった——母の。

思い出した。母を弟を守れなかった事、己の無力さを悔いた日々を、絶対的な力を求めた日々を思い出した。

そして激情が駆け巡る。母を亡くしたあの日からなくなることのなかった自責の念が、力への渴望が、その者——バージルを苛んだ。引き裂かれそうなほどに苦しかった。何がかは分からなかったが、

ただただ苦しかった。

狂いそうな苦しみ中、一縷の光すらなかったこの暗闇にまばゆい光が現れた。

それが一体なんなのかバージルは分からなかった。しかし必死にその光りを掴もうとした。それが自分が求めていた何か（・・・）な気がしたからだ。

必死にもがいてもがいて、何度も手を伸ばした。

そしてなんとかその光を掴んだ瞬間、意識が消えた。

彼が最後に見たものは——赤い三つの光だった。

## 五話

20年前、魔法世界は連合国と帝国の戦火の中にあった。その戦争末期、ある秘密結社が表舞台に姿を現した。

“完全なる世界”<sup>コモンズエンテレケイア</sup>。そう名乗る彼らは、“神代の魔法”を宿すとされる王族の血筋、中でも完全魔法無効化能力を持つ“黄昏の姫御子”を利用して魔法世界の崩壊を画策していた。

まさに魔法世界の存続がかかった危機。その危機を救ったのが、後世英雄と語られることになる“ナギ・スプリングフィールド”と“赤き翼”らである。彼らの活躍によって“完全なる世界”とその黒幕は倒れた。

それから20年後の今。英雄の息子ネギ・スプリングフィールドが、父がかつて戦った地——墓守り人の宮殿に立っていた。

ネギのまさに目前には白髪の少年がいた。白髪の少年——フェイト・アーウェルンクスは無表情だった。ただ険しい瞳がネギを見据えているだけだ。

「できれば話し合いで決めたい」

ネギがフェイトへ言う。ネギはフェイト達の行おうとしている計画の代替案を示したいと考えていた。

「……本気で言っているとは思えないね」

しかしネギのその言葉には穏便に済まそうという気配はなかった。両者の視線が絡み、闘気が膨れ上がっていく。間合いは拳一あるかどうか。いつこの均衡が崩れてもおかしくはなかった。

瞬間、フェイトの足元が割れ右腕が霞んだ。目にも留まらぬ早さの拳がネギの顔面を捉える。辺りに土煙が舞い上がり、岩が飛散す

る。

側にいた宮崎のどかが悲鳴をあげ、少し離れた所にいた長谷川千雨やオコジヨのカモミールがネギの名前を叫んでいた。

「ダ、ダメだ。生身の兄貴にあの攻撃を耐えられるはずがねえ……  
そんな、兄貴——」

フェイト程の実力になればただの拳でも凄まじい威力である。まして生身では耐え切れずに、頭部が爆ぜるように消し飛でしまうだろう。カモミールは攻撃を生身で受けたネギがやられてしまったと思っていた。

土煙が次第に晴れていく。ネギはそこに立っていた。

フェイトの拳は確かにネギの顔面を捉えていた。だが、ネギの顔には紋様が——闇の魔法を手にした時に腕に刻まれた紋様と同一のものが浮かんでいるだけだった。

「そういうことか」

それを見たフェイトはなにかを理解したのか、得心した表情を浮かべた。

対してネギは僅かに笑みを浮かべた。そして右腕をフェイトが突き出した右腕に添え、踏み込みと共にフェイトの腹部を左腕で突く。地面をえぐる程の踏み込みと土埃を巻き上げる程の拳圧を伴った先のフェイトの拳撃に比べ、ネギの拳撃は一見威力が無いように見えた。

しかし次の瞬間、大きな衝撃と共にフェイトが大きく弾き飛ばされた。地面を削り取る程の踏ん張りにより、体勢を大きく崩すことなくフェイトの体は止まった。小さな笑いが聞こえる。

「京都で僕は君に今はまだ無理だと言ったよね」

フェイトは下を向いていた顔をゆっくりと上げた。

「……遂にここまで来たか」

その瞳は妖しく、不気味に輝いていた。

「君は僕に、何も知らないただの子供だと言ったね。だが全てを知り、僕自身の答えを携えて来たぞ」

ネギがフェイトを見たまま、答える。その目は揺るぎ無く真っ直ぐとした物だった。

それに対するフェイトの答えは「受け入れられない」というものだった。

だがネギは始めから分かっていたようだ。だからネギの答えは一つだった。

「ああ、だから——拳でわからせてやるって言ってたんだ、フェイト」

フェイトは微笑を浮かべ、ネギは固く拳を握った。

少し離れた所で今のやり取りを見ていたネギの仲間達は、闇の魔法を使いこなしフェイトと互角に渡り合えたネギを見て、フェイトに勝てるのでは？ という希望に湧いていた。

しかし千雨とカモは様子が違っていた。なぜなら彼等は、闇の魔法を使いこなすということがどういう事なのかを知っていたからだ。闇の魔法を使いこなすということは、闇の魔法が異物ではなく自らのモノとなったということである。それはつまり常に自然状態で闇の魔法を維持しているということだ。

それを分かっていた二人は、そのことが何を意味しているのかも

分かってしまった。

「つまり、先生はもう、エヴァンジェリンと同じ、“人間”とは呼べないモノ……になつてゐるってことか？」

闇の魔法を使いこなすということ。それはエヴァンジェリンのよ  
うな“人外の化け物”になつてしまふということだ。

二人の不安をよそに、空気が震える程の闘気が再び張り詰める。  
そして次の瞬間、二人が動いた。

離れていた間合いを両者共に一足飛びに詰め、互いの右腕が相手  
の顔を捉える。その衝撃で二人が吹き飛ばされる。

両者が吹き飛ばされた間合いが広がったと思つた矢先、またも  
や両者が一瞬で間合いを詰め、拳と拳がぶつかり合う。ネギもフ  
イトも拳を繰り出しては相手の拳をいなし、拳をぶつけ合う。

二人の戦いによつて地面がえぐられ、余波の衝撃と石が、側に人  
質として捕らえられていた宮崎のどかと夏美に襲い掛かった。

思わず悲鳴を上げた二人に、一瞬ネギの注意がそちらに向いた。

その僅かな隙をフェイトは見逃さなかつた。より力が籠められた拳  
をネギの頭部を狙つて打つ。

達人同士の戦いでは、一瞬の隙が明暗を分けるものである。つま  
りフェイトの判断は間違いではなかつた。しかしネギ自身も、注意  
が逸れた時点でフェイトは仕掛けて来ると分かつていた。

その為、フェイトの強烈な拳打を右腕で弾き軌道を逸らすことで、  
まさに紙一重にかわすことができた。そしてカウンターとして踏み  
込みと共に左腕の肘を叩き込む。更にのどか達から離れる為に、体  
勢の崩れたフェイトを数十メートルまでフェイトを蹴り飛ばした。

瓦礫となつた岩からフェイトが起き上がると、呪文を唱えるネギ  
の姿が遠目に確認できた。

「ラス・テル・マ・スキルマギステル」光の精霊千一柱集い来りて

敵を射て』」

ネギの辺りに光の球がいくつも現れる。

「『魔法の射手 連弾・光の1001矢』！」

ネギが辺りに現れた光の球を、フェイトへ向けて放った。

魔法の射手は攻撃魔法としては最も基本的な技である。しかし闇の魔法を行使したネギの魔力は増幅しており、魔法の射手が最も基本的な攻撃魔法であるといってもその威力は増していた。

その魔法の矢、千一本がまさに雨の如くフェイトへ降り注ぐ。魔法の矢によって宮殿の地形がえぐられ、砕けていく中、フェイトは確実に光の雨をかわしていく。

（基本攻撃魔法とはいえここまでくれば大魔法と変わらない。まさにかつての千の呪文の男を思わせる――）

もはや基本攻撃魔法の威力ではない魔法の矢は、フェイトにかつて戦ったネギの父、ナギ・スプリングフィールドの姿を思い起こさせた。

そんな中フェイトの右足を何かが掴んだ。彼の足を掴んだのは、もちろんネギだ。

ネギは遅延させていた魔法の射手・光の1001矢を解放させ、崩拳と共に打ち出した。

魔法の矢を纏った拳『桜華崩拳』がフェイトへ迫る。しかしネギは気が付いていた。桜華崩拳を放つ前、フェイトの左目が妖しく光った事に。

次の瞬間、迫るネギの拳へフェイトは左目から光線を放った。光線を受けたネギの右腕は石像のように固まっていた。

フェイトが左目から放ったものは『石化の邪眼』という魔法であ

る。放たれた光線に触れたものを石へと変えてしまう高等な魔法だ。ネギは次々に放たれる光線を、魔法の射手によって巻き上げられたいくつかの岩を足場にして、離れながら避けていく。ネギは石化の邪眼の厄介さを知っている。そのために距離をとったのだ。

しかしフェイトは次の布石として石化の邪眼を使っていた。ネギが間合いをあけるであろうと予測していたためだ。そのためネギが退いた時から、次の呪文を唱えはじめていた。

「ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト『小さき王 八つ足の蜥蜴 邪眼の主よ』」

ネギはその呪文を知っていた。かつて修学旅行先の京都で初めて戦ったフェイトが放った魔法の一つだったからだ。そしてその魔法の危険さも知っていた。

「時を奪う毒の吐息を』」

フェイトが呪文の詠唱を終える。そしてフェイトが、触れただけで石化させてしまう雲、『石の息吹』を繰り出した。

石化の雲が瞬時に広範囲へ広がる。その雲は京都で喰らったものとは比較にならないほど大きく、ネギは全速力で雲に触れないように離れる。しかし雲の広がりの方が早かった。石化の雲はネギを覆いかぶさるうとしていた。

その時ネギが呪文を唱えはじめる。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル『来たれ、雷精、風の精。雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐』！」

ネギの右腕には紫電が走っていた。そして雲を打ち破り、雲を晴らす暴風を打ち出した。

ネギの右腕から放たれた魔法『雷の暴風』はまさに雷を纏った嵐だった。石化の雲を切り裂き、吹き飛ばしてしまった。

雷の暴風を放ったネギが体勢を立て直した瞬間、フェイトがネギの背後に現れた。それも周囲にいくつもの黒い剣『千刃黒耀剣』を展開してだ。

展開していた千刃黒耀剣をフェイトは全てネギへ向けて放った。抜け出す隙間もなく刃が迫り来る。まさに全方位。剣がネギの目の前まで迫っていた。ネギはそれを――砕いた。紙一重でかわし、拳を、掌を、肘を使い体術のみで千刃黒耀剣を砕いていく。打ち砕かれた剣の破片と、地面をえぐる剣によって土煙が舞い上がる。

そしてついに、ネギは全ての千刃黒耀剣を捌ききった。流石のネギも少し呼吸が乱れていた。

しかし土煙が晴れた先に広がる光景に、ネギは思わず目を見開いた。そこには一面、文字通り無数の黒い杭が広がっていた。

フェイトはこれを狙っていた。石化の邪眼も石の息吹も千刃黒耀剣も、このための布石でしかなかった。

先ほどの千刃黒耀剣とは比べものにならない密度と数の杭。それが全てネギに襲い掛かろうとしていた。

「『万象貫く黒杭の円環』。かの英雄ジャック・ラカンが凌いだよ。君はどうだいネギく――」

フェイトが話し終わる前に、彼の体は吹き飛ばされた。

一体何が起こったのかフェイトは分からなかったが、反射的に反撃していた。しかし目の前に現れたのは、『千の雷』という雷系最大の魔法を肉体に取り込み、『雷天大壮』という姿になったネギだった。この雷天大壮は瞬間的に雷と同様の速度で動くことが可能になる技法である。ネギはまさに雷速で黒い杭をかい潜り、フェイトを殴ったのだ。

ネギはフェイトの反撃を止め、肘でフェイトを打ち付けた。さら

に裏拳でフェイトを吹き飛ばす。

落下していくフェイトへ向かってネギは追撃する。普通なら間に合わないだろう。しかし雷速を生み出せる今のネギならそれは容易なことだ。

ネギの姿が瞬くと、遠く離れていたフェイトの腹に拳打を打ち込んでいた。フェイトは遥か下まで殴り飛ばされる。地面へと打ち付けられたフェイトへ、ネギはまたもや雷の如く近づく。

それに対してフェイトは肘を突き出すだけだった。しかし、ネギはそのカウンターを喰らってしまった。

「ネギ君。その技への対策は君の師匠が全国ネットで公開済みだろう。ダメだよ。この戦いで出し惜しみはなしだ」

それを聞いたネギは、観念したように遅延させていた千の雷を解放した。その解放した千の雷をすぐに手元に固定し、掌握して肉体へ取り込む。

千の雷を二重に取り込むことで『雷天双壮』を発動させる。これはネギの師匠であるジャック・ラカンですら対応しきれなかった、ネギの独自魔法であり、切り札でもある。

そしてすぐに次の攻防が始まる。フェイトは石の剣を、ネギは断罪の剣を精製する。二人の激しい剣戟が始まった。

\*

エヴァンジェリンは、近右衛門のほか、近衛詠春、アルビレオ・イマと共に世界樹の前にしてあることを問いただしているところだった。それは召喚魔たちが目指している先、世界樹についてだ。

エヴァンジェリンは近右衛門から、召喚魔たちの狙いは世界樹だ

と聞いていた。世界樹が蓄える魔法世界から流れ出した膨大な魔力を利用しようとしている、と。

しかし彼女はそれに違和感を抱いていた。疑念までいかなくとも腑に落ちないと感じていた。そんな最中に魔界が動き出したということを知り、違和感と疑念へと変わった。

麻帆良学園に封印されていたエヴァンジェリンの耳にも、魔界の状況は少しではあるが入っていた。何年か前にかつて封印された魔界の帝王ムンドウスが復活したが、再び封印されたことも含めてだ———もつとも、魔帝ムンドウスを再度封印した張本人のダンテのこととは知らなかったようだ。

魔界という世界は強力な主導者がいなければ、一つに纏まって動くはずはない。なぜなら———一概には言えないが———魔界の住人、つまり悪魔は理性よりも本能のもと動くものだからだ。そのために魔界では日夜熾烈な殺戮と生存競争が繰り返されているのである。それを纏めていたのが魔帝ムンドウスだったわけである。しかしその力による絶対的な支配がなくなった途端に魔界の纏まりなどなくなつた。そして今日まで終わらない覇権争いが続いていたはずだ。だが今、魔界が動いているという。それは魔界が何者かの力により纏まり、何者かの意志により動いているということを表している。そしてその悪魔達は、召喚魔達と同様に世界樹を目指している。

魔法世界よりもさらに濃厚な魔力が充満している魔界が、世界樹に蓄積された魔力欲しさにわざわざ動くわけがない。また、世界樹の中には魔法世界と旧世界を繋いでいたゲートがあるが、それはもう繋がれており魔界が動く理由にはならないだろう。

つまり魔界の狙いも世界樹、正確に言えば世界樹にある何かだ———とエヴァンジェリンは考えていた。また、召喚魔達の召喚主である“完全なる世界”も同じものを狙っているとエヴァンジェリンは踏んでいた。

つまり近右衛門の説明は嘘だった、と彼女は考えたのだ。そして本当の事を問い詰めていたというわけだ。ところが近右衛門は言お

うか渋っていた。そんな中、アルが口を開いた。

「時にキティ。あなたもかつては確かに普通の女の子だったはずですよね」

「何を言い出す？ 昔話が地雷なのは、知っているよな？」

それを聞いたエヴァンジェリンは眉間を寄せ、明らかに不快な表情を見せた。しかしアルは構わず続ける。

「あなたを、今のあなたへと変えてしまった人物について、なににご存知ですか？」

「知るか。おおかた不死の秘宝にでも嵌まった頭の悪い魔法使いだろう」

抑揚のない、淡々とした答えを返したエヴァンジェリンは、そこで一拍おいて一瞥もなく続けた。

「もう殺した。600年も前の話だ、興味もない」

興味もない、というのは本心だろう。しかしどこか別の感情があるようにも見える。そんなエヴァンジェリンの横顔を見ながら、アルが問い掛けた。

「……その人物が死んでなかったとしたら？」

エヴァンジェリンが怪訝な表情を浮かべる。横を向いていた顔をアルへと向けた。そのアルは表情を変えず続けた。

「そして、その人物が今もなお生きてあそこにいる、としたら？」

エヴァンジェリンは怪訝な表情のままアルへ反論する。

「死んでいなかった……だと？ それはオカシイぞ。もともと不死を得ていたのならば、私を使って研究する必要がない」

彼女の指摘はもつともであり、矛盾を突いていた。しかしアルはあることを一つ付け加えた。

「ではその人物が『不死』ではなく、『不滅』だったとしたら？」「それは……」

『不死』ではなく、『不滅』。それは肉体的に死を迎えようともその『存在』は生きているということである。『不滅』は肉体的な死を迎えると、魂はそのままにもう一度生まれることや、既存の肉体に入り込むことで可能である。

そしてその人物が『不滅』であるなら、エヴァンジェリンが昔に殺したとしても今も姿を変えて生きているということは否定できなくなる。

エヴァンジェリンがそれを察した様子を見ると、アルは核心に迫った。

「“紅き翼”も20年前討伐に失敗し、10年前からうじて封印に成功しました——ある一人の英雄の犠牲によって」

エヴァンジェリンが長年待ち続け、ネギが追いつづけた存在。アルがナギ・スプリングフィールドの事を言っていることは明白だった。

一方、エヴァンジェリンは目を見開いて衝撃を受けていた。それは先程の『不滅』と『ナギ・スプリングフィールド』の二つから見えてくる、答えに至ったからだ。

「そうです。あそこに眠っているのは、  
始まりの魔法使い、『  
造物主<sup>ライフメイカー</sup>』  
です」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8133t/>

---

立派な魔法使い 偉大な悪魔

2011年10月12日14時10分発行